

「ドルコスト平均法」

岩瀬 直行 陸自88

こんにちは。岩瀬です。

今回は長期・分散投資の代表的方法であるドルコスト平均法について説明いたします。

通常、金融商品を購入する場合、1回で一気に入入するのが一般的と思われま

す。よく退職自衛官が退職金の運用として、株や投資信託を大口で一気に入入してしまい、その後下落し、いつまで経つても評価額がマイナスで損をするケースをよく見かけます。このやり方は右肩上がりに価格が上昇し続けるのであれば有効なのですが、下落が続く、乱高下が激しい市場時には最悪の結果を生むことが多いです。

2022年は米国の中央銀行がインフレを退治するため、急速に利上げを行うとともにバランスシートの縮小という方法で市場から多額の資金を吸い上げたため米ドルに資金が集中し、米国株を中心に世界の株は

3回(3月、6月、10月)にわたり暴落し、多くの投資家は大きな痛手を被りました。

株が好調だった頃にトレンドに乗って投資を始めた人の多くは、株の急降下に対応できず、価格が下がりにすぎたため売ることもできず、塩漬け状態となっている場合が多いと聞きます。このような状況下でも、暴落の影響を殆ど受けず、逆にプラスを維持できる投資方法がありま

す。それがドルコスト平均法です。ドルコスト平均法とは、価格が変動する商品に対して「常に一定金額で定期的」に購入する方法で暴落等のリスクを抑制し、安定した収益を得ることが可能な方法です。

ドルコスト平均法はドルを利用するアメリカでの呼び方で、イギリスではポンドコスト平均法と呼んだりします。

一例をもって説明します。

ここに価格の変動するAという商品があるとします。Aは4カ月間下落し続け、その後2カ月で当初の半値まで戻したと想定します(600円→450円→300円→150円→200円→300円)。1カ月の600円の時に一気に30個分を

購入したとします。そうすると合計で1万8000円(600円×30個)の価値となります。しかし6カ月目に300円に価格が下がった時に売却したならば、売却額は9000円(300円×30個)となり、9000円の損となります。

それに対し6カ月間、Aを毎月3000円の定額で購入し続け、6カ月目の購入が終わった直後に3000円で売った場合、購入額の合計が一気に購入する場合と同じであるのも関わらず、損どころか約1・1倍の儲けとなります。

細部の計算は、1カ月目が5個(3000円÷600円)、2カ月目が6・7個(3000円÷450円)、3カ月目が10個(3000円÷300円)、4カ月目が20個(3000円÷150円)、5カ月目が15個(3000円÷200円)、6カ月目が10個(3000円÷300円)となり、合計が66・6個となります。これを3000円で売った場合、約2万円(3000円×66・6個)となり購入額の合計の1万8000円を超えるのです。

次に価格の変動が6カ月間で600円→450円→300円→150円→500円→800円というように4カ月目まで下落し続け、その後2カ月で回復するも6カ月目の値段が1か月目よりも高くなっているパターンで計算しますと、一気に購入する場合は2万4000円となり1・3倍、毎月分散して購入する場合は約4万1000円で2・3倍となり、差が益々顕著となります。ただし、これとは逆に6か月100円から600円まで一方的に価格が上昇する場合は一気に購入する場合の儲けが10万8000円で6倍なのに対し、分散の方は4万4100円です。このようにドルコスト平均法は長期投資で途中の乱高下のリスクに対応できることが最大のメリットとなります。注意すべき点はあくまで定額で購入し続けることで、決して一定の口数で購入することではありません。仮に決まった口数で購入し続けますと、全体のパフォーマンスは却って下がってしまいます。如何にして購入したトータル数を増やすかが勝利への分かれ道となります。

今回はこれを実際の投資信託を購入する場合に当てはめて説明させていただきます。